JOURNAL
OF
INDIAN AND BUDDHIST STUDIES

(INDOGAKU BUKKYŌGAKU KENKYŪ)
Vol. LXV No. 2 March 2017
〔141〕

Edited by
JAPANESE ASSOCIATION OF
INDIAN AND BUDDHIST STUDIES
(NIHON-INDOGAKU-BUKKYŌGAKU-KAI)
2F Hongo Bldg., 3-33-5 Hongo,
Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033
Japan

Indian and Buddhist Studies Treatise Database Home Page
http://www.inbuds.net/

ISSN 0019-4344

印度學佛教學研究

第六十五巻第二号

〔通 巻 第 141 号〕

平成 29 年 3 月

日本印度学仏教学会

印度學佛教學研究

第六十五巻　第二号

東京大学における
第六十七回学術大会紀要（二）

平成 29 年 3 月

日本印度学仏教学会

目次

87 仏教学の方法と未来――領域独存から超域共存へ――……下田正弘……一
88 シャンカラ派における救いの意味構造……澤井義次……一二
89 道宣『羯磨疏』における戒体説の背景について……Thomas NEWHALL……二〇
90 中国仏教における『首楞厳経』の受容態度……小野嶋祥雄……二四
91 『提謂波利経』撰述意図の考察……新田優……三〇
92 智儼の時間論と相即・相入説の形成……櫻井唯……三四
93 宝山寺北斉刻経碑から見た霊裕の『華厳経』観……倉本尚徳……三八
94 中国唯識学派における三性説の解釈について――玄奘訳『摂大乗論釈』を中心に――……吉村誠……四四
95 智顗の実践論よりみる『維摩経』理解の特質について……山口弘江……五一
96 『涅槃経』所説戒聖行の果について――智顗の教学を中心として――……日比宣仁……五八
97 『念仏鏡』諸本の系譜……加藤弘孝……六二
98 『往生論註』と老荘思想……遠山信証……六七
99 唐代居士の三教観――李翺を中心として――……大橋崇弘……七一
100 円仁の『入唐求法巡礼行記』に関する一考察――赤山法華院の仏教儀礼を中心に――……朴昭映……七六
101 入宋僧俊芿と南都戒律復興運動……大谷由香……八一
102 東大寺図書館所蔵写本『具分唯識』について……高田悠……八八
103 『妙行心要集』における無作三身説……柳澤正志……九二
104 重授戒灌頂における三昧耶戒……寺本亮晋……九八
105 法然における助業の業因性と業成論についての一考察……杉浦道雄……一〇四
106 信瑞纂『浄土三部経音義集』の書誌的整理――特に日本現存本について――……前島信也……一一〇
107 親鸞における天台教判用語の検討――「円融」の語を中心に――……四夷法顕……一一四

108 『教行信証』「行文類」両重因縁釈の一考察……伊藤顕慈……一一八
109 親鸞の本願三心観について――字訓釈を中心として――……和田隆道……一二二
110 初期真宗における東国門徒の臨終来迎観……板敷真純……一二六
111 知空の『無量寿経論註翼解』の「覈求其本釈」について……飯島憲彬……一三〇
112 円月の行信論研究……伊藤雅玄……一三四
113 島地大等の仏教研究法と真宗学……川元恵史……一三八
114 真福寺大須文庫資料に見る日本禅の形成……末木文美士……一四三
115 『法華問答正義抄』にみられる日本の禅宗文献
――『見性成仏義』及び『明心抄』について――……古瀬珠水……一五一
116 道元禅師における「説心説性」の定義について……石井清純……一五七
117 乙堂喚丑『正法眼蔵続絃講議』の発心観……菅原研州……一六六
118 中世曹洞宗と『無門関』
――京都大学谷村文庫所蔵『無門関抄』を中心として――……龍谷孝道……一七三
119 近代における日蓮宗僧侶の海外留学……安中尚史……一七九
120 近世日蓮教団の檀林における修学内容についての一考察……木村中一……一八七
121 『円極実義抄』の成立について――事具三千の語をめぐって――……三浦和浩……一九四
122 日蓮聖人における五義の一考察――鎌倉期の遺文にみる「教」の説示――……深谷恵子……一九九
123 医療の守護者としての仏――『酬医頓得』について――……進藤浩司……二〇三
124 「変」、「変相」、「変文」の意味……辛嶋静志……二〇八
徳永宗雄先生を偲ぶ……赤松明彦……二一六
訃報……二一〇
日本印度学仏教学会賞選考規約……二一二
日本印度学仏教学会企画編集委員会内規……二一三
日本学術会議だより……七四九
第67回学術大会パネル発表報告……七五七

125 ヴェーダ文献における金属関連語……山田智輝……七六二
126 pratilomagāyatrī——逆順に唱えるガーヤトリーマントラと koṭihoma について——……石井(浜本)由理……七六八
127 チャンドラーナンダとバーヴィヴェーカの年代に関する考察
——「二指」説をめぐって——……何欽欽……七七五
128 ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派の「普遍の定義」の再検討……平野克典……七八二
129 ジャイナ教における万物一体観……渡辺研二……七八八
130 パーリ語における *hīya-ti, hāya-ti* について……稲葉維摩……七九三
131 paññatti の意味と種類——*Puggalapaññattiaṭṭhakathā* を中心として——……韓尚希……七九七
132 パーリ仏教文献における「自殺観」の扱い方
——『ヴィナヤ』と『サンユッタニカーヤ』を中心として——……内田みどり……八〇一
133 学処解説の違いから見た有部系律蔵の系統分類……佐々木閑……八〇九
134 忍辱仙人説話……岡田真美子(真水)……八一七
135 インド浄土教の修道論の祖型——四輪との関係において——……中御門敬教……八二三
136 法華経における五道と六道……前川健一……八三〇
137 『金光明経』「最浄地陀羅尼品」と『大宝積経』「無尽慧菩薩会」について……ウルジージャルガル……八三六
138 『如来秘密経』における一字不説論……王俊淇……八四〇
139 いわゆる「無表業の誤解」について……青原令知……八四八
140 両毘婆沙論における大衆部説について……石田一裕……八五三
141 アビダルマ文献における疑——『大毘婆沙論』を中心に有部の真理観を探る——……水野和彦……八五七
142 Atiśa の如来蔵思想——その典拠と大中——……宮崎泉……八六五
143 初期唯識思想における「外のアートマン」についての一考察
——初期唯識思想特有の認識の構造をめぐって——……北野新太郎……八七一
144 『大乗荘厳経論』の浄土観——瑜伽行唯識学派における国土清浄の理論——……上野隆平……八七七
145 『楞伽経』における意識の滅……曽柔佳……八八一
146 『瑜伽師地論』における tajjo manaskāraḥ 再考……楊潔……八八五

『如来秘密経』における一字不説論

王　俊　淇

仏の説法観は Lamotte（1976, 12）と丹治（2002, 19–22）によって五種類に分けられる．そのうち，一字不説論が四番目に位置づけられる．この一字不説論は『如来秘密経』(*Tathāgataguhyasūtra*; 略号 TG)「如来語密品」の中核をなし，『大智度論』，*Mahāyānasūtrālaṃkāra*（MSA），*Prasannapadā*（PsP），*Laṅkāvatārasūtra*（LA），*Tattvasaṃgraha*（TSg）と同 *pañjikā*，Kumārila の *Ślokavārttika*（ŚV）等の文献に引用され，大乗仏教の通説として仏教の内外に知られていた．そこで，『如来秘密経』は一字不説の成立上の重要な里程標であるといえよう．本稿では，一字不説と原始仏教以来の伝統との関係を考察した上で，虚空説法をもって一字不説と如来説法の矛盾の解消を目指す本経の意図を明らかにしたい．

「如来語密品」は後代の多くの論書に引用されるため，梵文断片を以下のように回収できる．

A. ***Prasannapadā***：[A1] Poussin（1903: 366–367）；[A2] 同（1903: 539）

B. **『楞伽経』(*Laṅkāvatārasūtra*)**：[B1] 南条（1923: 142–143）；[B2] 同（1923: 144）；[B3] 同（1923: 240）

C. ***Mahāyānasūtrālaṃkāra***: Lévi（1907: 79）

『如来秘密経』の一字不説論を明確に引用するのは PsP および LA であるが，梵文写本・両漢訳・チベット語訳と照らしてみると，PsP と LA の引用はいずれも多少なりともアレンジされた内容を示している．

一字不説論の梵文写本の翻刻は次のようである．

yāṃ ca śāntamate rātriṃ tathāgato nuttarāṃ samyaksaṃbodhim adbhisaṃbuddhaḥ yāṃ ca rātrim anupādāya parinirvāsyati asminn antare tathāgatenāntaśa ekākṣaram api nodāhṛtaṃ nāpi pravyāhariṣyati |[1] TG 5a4–5

【訳】ある夜に如来は無上なる正等覚を現等覚した．そしてある夜に取らずに完全に涅槃するであろう．この間に，如来によって一つの音節さえも語られなかったし，[未来に]発せられることもないだろう．

一字不説の理由は「如来は常に三昧に入っており[2]，如来は出息も入息もせず，考察（尋）も伺察（伺）もしないのであるから」[3]ということにあるとされる．

禅定と発語・尋伺・出入息の関係

この理由の中で言及された禅定と発語・尋伺・出入息の関係については，『如来秘密経』は詳しい分析を行っていない．ただし，これらの関係の説明は，阿含経典に遡ることができることから，『如来秘密経』編纂の時代には仏教界の常識であったのだろう．たとえば，『長阿含経』巻九「十上経」は，

> 若入初禅則声刺滅．入第二禅則覚観（尋伺の旧訳）刺滅．入第三禅則喜刺滅．入第四禅則出入息刺滅．（T no. 1, 1.56c29–57a2）

として四禅との関係で規定している．同様の説明は『雑阿含』17.474 経にも見られる．したがって，原始仏教の段階ですでに，発語・尋伺・出入息の三者は禅定の進展に従って，順次に断たれる対象と見なされていたことがわかる．このばあい，発語・尋伺・出入息の三者の関係は次のように言えるであろうか．

1. 出入息は音声を発するための身体的な必要条件である．
2. 尋伺の二心所は発音のための心理的な必要条件である．

虚空説法

ところで，もしも如来は常に禅定に住するならば，釈迦は成道してから入滅するまでの間に，如何にして説法の事業をなしたのか，という疑問が当然湧いてくる．これに対して，『如来秘密経』は次のように説明している．

> na khalu punaḥ śāntamate tathāgatasya dantoṣṭhatālujihvāmukhadvārāc chabdo niścarati | śrūyate ca niścarati sa ca tathāgatasya vāgrutaniścāra ākāśān niścarati satvānāṃ caivaṃ bhavati tathāgatasyaiva mukhadvārān niścaratīti | . . . ye khalu punaḥ śāntamate satvās tathāgata-vāgguhyajñānānupraviṣṭāḥ na te tathāgatavācaṃ mukhadvārān niścarantī saṃjānate | api tu khalv ākāśān niścarantī saṃjānāti | TG 5a7–9; 6a5
>
> 【訳】さらに，シャーンタマティよ，如来の音声は歯・唇・口蓋・舌・口から生じるわけではない．しかし，［衆生には如来の音声が］聞かれ，生じる．まさに（ca），如来の語と音声の生起は虚空から生じるのである．しかし，衆生たちは「ほかならぬ如来の口から生じる」というように思うのである．［中略］さらにまた，シャーンタマティよ，如来の語の秘密に関する智に入った衆生たち，彼らは如来の語が口から生じるとは考えず，そうではなくて，虚空から生じると考えるのである．

この虚空説法説に適う文は竺法護による旧訳『如来秘密経』に見られない．また，旧訳『如来秘密経』では未だ一字不説の教説は説かれていないことがすでに伊久間（2016）により指摘された．したがって，梵文写本・宋法護訳・チベット語訳において，この虚空説法の教説が一字不説論の直後に出るのは，理論的な要請を示唆するように思われる．すなわち，如来が常に禅定，無言語活動の状態に住することと，如来が大悲心にもとづいて説法を通じて衆生を救済するという事業との矛盾をいかに解消するかという説明が求められたものと考えられる．

『如来秘密経』の一字不説論を引用した『楞伽経』の場合，虚空説法のかわりに，三仏説を立てて法性仏が無言語活動で，等流仏と変化仏が説法するという枠組みの下で，一字不説と如来の説法の矛盾を調和する意図が著しい．『楞伽経』と比べると，『如来秘密経』の仏身論は後代の三身説の前段階に位置すると考えられよう．

そのほかに，如来の語には別の秘密がある．衆生たちは「如来の語はまさに信解と成熟と意楽に応じて生じる」と考えるが，その場合，如来は分別を持たず，平等（upekṣā）である[4]，という秘密は後代の全知者（sarvajña）論証[5]と関連しているので，諸秘密において特に重視されるべきである．この中で，如来の説法を手で触れず風に動かされた楽器およびすべての意楽を満たせる如意宝珠に譬える．如来の語は楽器のように衆生の意楽に対する知によって動かされ，あるいは如意宝珠のように衆生の意楽に応じて虚空から生じるが，如来自体は無分別であり，平等であると説明される．したがって，この秘密も「虚空説法」説に属すると考えられるであろう．

まとめ

禅定・無尋伺・無出入息の三つはそれぞれ言語活動がないことの根本的理由，身体的な理由，心理的な理由といえよう．一方，言語活動がないことを拡大解釈し，如来の完全な沈黙すなわち一字不説まで主張する『如来秘密経』は三身説が未だ成熟していなかった背景の下で，虚空説法の教説をもって一字不説と仏の大悲による説法の事業との矛盾を調和しようとする意図があると指摘した．

苫米地等流博士に Tathāgataguhyasūtra 写本の画像データを頂戴した．この場を借りて感謝申し上げます．

1）T no. 310, 11.55c6–10; T no. 312, 11.719b21–24; Derge 132b6–133a1; Peking 151b4–5.

2)「如来常在定」説は『大毘婆沙論』では「分別論者」の主張として有部によって排斥される（T no. 1545, 27.410b26）.『異部宗輪論』はこれが大衆部系の通説であるという（T no. 2031, 49.15c3–4）.

3) satatasamāhito hi śāntamate tathāgataḥ na tathāgata ucchvasati vā prasvasati vā vitarkkayati vā vicārayati vā TG 5a5.

4) api ca śāntamate ye yathādhimuktāḥ satvāḥ yathāparipakvāśayāḥ te tathaiva tathāgatavācaṃ niścarantī saṃjānate | tatra ca tathāgataḥ avikalpa upekṣakaḥ TG 6a8–9.

5)『如来秘密経』と全知者論証と Kumārila による全知者批判については，吉水（2015）参照.

〈参考文献〉

(一次文献)

Tathāgataguhyasūtra 写本. Shāstri 目録 vol. I, no. 18. Substance, Nepalese yellow paper. 16 × 3¾ inches.

Lévi, Sylvain, ed. 1907. *Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra: Exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra*. Tome I, *Texte*. Paris: Champion.

Poussin, Louis de La Vallée, ed. 1903. *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*. St. Pétersbourg: Commissionnaires de l'Académie Impériale des Sciences.

南条文雄編 1923『梵文入楞伽経』大谷大学.

(二次文献)

Lamotte, Étienne. 1976. *The Teaching of Vimalakīrti: Vimalakīrtinirdeśa*. London: Pali Text Society.

Shāstri, Haraprasad. 1917. *A Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts in the Government Collection under the Care of the Asiatic Society of Bengal*. Vol. I. Calcutta: Asiatic Society of Bengal.

伊久間洋光 2013「『如来秘密経』の梵文写本について」『印仏研』61 (2): 888–884.

——— 2016「一字不説——『如来秘密経』の神変を中心に——」『密教学研究』48: 1–14.

丹治昭義 2002「一音説法」『南都仏教』81: 19–44.

藤田宏達 1984『〈倶舎論〉所引の阿含経一覧』北海道大学文学部印度哲学研究室.

本庄良文 1984『倶舎論所依阿含全表』私家版.

吉水清孝 2015『クマーリラによる「宗教としての仏教」批判——法源論の見地から——』龍谷大学現代インド研究センター.

〈キーワード〉『如来秘密経』，一字不説，虚空説法，禅定，語密

（東京大学大学院）